

## タイトル:『氷の彼』(約2000文字)

緊張した顔の透子(モノローグ)「私、桜井透子——いま、とっても緊張しています」

そこは会社の会議室。長机の周りには数人の社員が並び、前方には資料を映したモニター。  
そして、その最前列には——

透子(モノローグ)「なぜなら、“氷の真木”と呼ばれる超怖い課長のチームに配属されてしまったから……！」

冷えた空気をまとったような男性が、腕を組んで資料を見つめている。  
それが、真木課長。周囲の誰もが息をひそめていた。

透子(モノローグ)「今日はそのチームでの、初めてのMTG……」

静寂の中、紙をめくる音がひとつ響いた。  
真木「……待て」

低い声が会議室に落ちた瞬間、全員がビクリと肩を揺らす。  
透子も反射的に背筋をさらに伸ばした。

真木「ここの数値が違う。確認したのか」  
透子(私が担当したところだ……！)  
透子「申し訳ございません！　すぐに確認を——……あれっ？」

資料をめくりながら、透子は青ざめる。  
確かに、数値が違っている。  
何度もチェックしたはずなのに、どうして……？

冷や汗が、首筋を伝った。

重たい沈黙が会議室に広がる。  
美園だけはニヤリと笑っていた。

昼休み。  
社員たちの笑い声とコーヒーの香りが漂う。  
透子は端の席で、紙の資料とノートPCの画面を見比べていた。

透子(おかしいな…やっぱり違う数値になってる……)  
慌てて再計算しても、結果は変わらない。

隣のテーブルでは、美園と同僚が楽しげに話している。  
美園は透子を横目に見て、再びニヤリと笑う。

同僚「真木課長ってさ、厳しいけど、ちゃんと努力を見ってくれるよね」  
美園「そうね。評価されるべき人は、ちゃんと評価されるものよ」  
同僚「やっぱり奈々さんのこと、信頼してるんだと思う！」

美園「ふふ、分かる？ 私、課長と一番近いところで仕事してるから」

その言葉とともに、美園の視線が一瞬だけ透子をかすめ、透子に聞こえる声量で話す。  
美園「簡単な資料もまともに作れないじゃ、あの人の下で働くことは無理ね」  
同僚と顔を見合わせて、くすくすと笑う。

昼休憩を終えた美園が立ち上がり、ふと振り返る。  
美園「桜井さん、さっきPDF送ったから、二十部印刷しておいてくれる？  
これくらいなら、あなたでもできるわよね。午後イチで使うから、なるはやでお願いね」

透子「えっ？あの...」

言い終えると、返事を待たずに踵を返す。  
笑い声とヒールの音が遠ざかっていく。

透子は何も言えなかった。  
マウスを握る手が、わずかに震える。

残されたコーヒーをひと口飲むと、苦味が喉の奥に残った。

静かな資料室。  
ファイルの擦れる音だけが響く。  
透子は美園から頼まれた資料を抱えて、コピー機の前に立っていた。  
透子(これを終わらせたら次は資料の修正...)

——プリンターが突然、停止音を立てる。

透子「え、ウソ.....紙詰まり？ あっ、やだもう.....！」

必死に直そうとして、トナーをこぼす。  
手が真っ黒になった瞬間、背後から声。

真木「何をしている。」  
透子「っ、ま、真木課長！？ ちょっと、トナーが.....！」

見上げた真木の顔は、相変わらずの無表情。  
彼は軽くため息をつき、袖をまくって手を伸ばした。  
トナーを直す動きが、驚くほど慣れている。

真木「こういうときは落ち着いて順番を見ろ。ほら。」  
透子「.....ありがとうございます。」  
真木「焦るのはいい。だが、焦ってばかりでは成果は出ない。」

それだけ言って去っていく背中を、透子はじっと見つめた。  
透子(冷たい人、って思ってた。でも.....ちゃんと助けてくれた)

黒く汚れた指先を見て、なぜか心が少しだけ温かかった。

それを見ていた美園（何よ…結果的にアシストしちゃったってわけ?!）  
美園「……気に入らない」

定時後  
フロアに残るのは、透子と真木だけ。  
真木は自分の席で電話をしていた。

真木「ええ、では明日の打ち合わせは——了解です。」

電話を切ると、透子が提出した資料に目を通す。  
パソコンの画面を見ながら、小さく呟いた。

真木「……問題ない。ドライブに格納したらそのまま上がっていい。」  
透子「…っありがとうございます！」  
真木「お疲れ様」  
透子「え…っあ、お疲れ様です！」

いつもの真木より少しだけ優しい言い方に、思わずきゅんとした透子。  
透子はデータをドライブに移したあと、帰宅。

翌朝、出社すると保存したはずの資料が消えており、バックアップも消えていた。

透子「……え。え!? データ……どこ!? うそでしょ……!」  
（今から使うのに…!）

パニックになる透子。そこへ、真木が現れる。

真木「どうした。」  
透子「データが……全部、消えちゃって……」  
美園「私が作り直しましょうか？」  
真木「その必要はない」  
実は昨日、完成した資料を真木が社用USBに保存していた。

給油室、美園が透子に声をかける。  
美園「課長がUSBに保存していてよかったわね。でもわざわざバックアップ取られるなんて……あなたよっぽど信用されてないのね」

透子（やっぱり…そうなのかな…）

給油室へ小走りで訪れる沙耶「桜井さん、真木課長が至急会議室Aに来るようになって！」  
透子「えっ…」

ここまで（引きで締める）

=====

以降はあくまで今後の流れの参考として記載しております。  
※ネームへ起こす必要はございませんので、ご確認のみお願いいたします。

急な予定変更があり、  
真木が別案件へ行くことになり、資料の納品を任される透子。

真木「代わりに行けるか？」  
透子「はい！行きます！」

のちにオフィスでそのことを知った美園。  
美園がわざと口元を隠して笑った。

美園「大丈夫？ 昨日もバタバタしてたのに。」  
透子「……大丈夫です。」

午後、クライアント先。ガラス張りの会議室。  
大勢の視線。  
質問に詰まり、手が震える。

（どうしよう……！）

そのとき、真木の声が脳裏で蘇る。  
——「数字の背景を語れ。」

透子「こちらのデータはSNSの反応分析を加えたものです。数値よりも“熱量”を……」

自分の声が少しだけしっかりしている気がした。  
プレゼンが終わると、クライアントが微笑む。

クライアント「熱意が伝わりました。ありがとうございます。」

（やった……！）

夜の オフィスロビー  
透子が戻ると、美園が真木のデスクにいた。

美園「課長、私も次の案件、一緒に——」  
真木「不要だ。もう決めてある。」

美園「……桜井さんですか？」  
真木「ああ。」

一瞬、美園の笑顔がひきつる。  
透子はその場に入ると、彼女は優雅に立ち上がる。

美園「……おめでとう。課長のお気に入りなんて、すごいわね。」  
透子「えっ、そんな……！」

去っていく美園のヒールの音が、少し怖く聞こえた。

真木は書類を見ながら、淡々と言った。

真木「報告を。」

透子「プレゼン、無事に終わりました。質問にも、なんとか答えられました！」

真木「.....大きな問題はなかったようだな。」

透子「はい！ 次はもっと上手くやります！」

真木の目が、ふと優しくなった気がした。

彼は少しだけ口角を上げた。

真木「桜井。よくやった。」

その瞬間、胸の奥で何かが弾けたように熱くなる。

まるで初めて春の風に触れたみたいに。

透子「えっ.....あ、ありがとうございます！」

真木「次は、俺の手を煩わせるな。」

いつもの調子で言い残し、席を立つ真木。

けれどその背中が、今日はなぜか遠く見えなかった。

夜 駅前

退勤後。

透子が改札を抜けると、美園がベンチに座っていた。

夜風に髪を揺らしながら、缶コーヒーを指先で転がしている。

透子「！...お疲れ様です」

美園「お疲れ様...偶然ね」

「...ねえ、桜井さん。あの人に認められたなんて調子に乗らないことね。」

透子の胸の奥が、少しだけ冷たくなる。

けれど、目を逸らさずに言葉を返した。

透子「.....浮かれてません。ただ、今日は、嬉しかっただけです。」

美園「そう。.....ならいいけど。」

美園はゆっくりと立ち上がり、ヒールの音を響かせながら歩き出す。

振り返りもせず、ぽつりとひと言だけ残した。

美園「“お気に入り”って、長くは続かないものよ。」

その言葉が夜風に溶けていく。

透子はしばらくその場に立ち尽くし、

ふっと顔を上げた。

街灯が照らすビルの屋上には、まだ灯りが残っている。

きっと、真木がまだ働いている。

透子「.....今は、それでもいい。」

（今日、初めて褒められた。  
それだけなのに、世界が少し違って見える。）

夜風が頬を撫でる。  
透子は鞆を抱えながら、静かに笑った。

——きっと、また明日も頑張れる。